

常省の墓



毎年、7月23日に安曇川町上小川の藤樹書院では、「常省祭」が行なわれます。常省とは、中江藤樹の息子で、藤樹の死後はその学問を受け継いで中江家の跡取りとなった人物です。7月23日は常省の命日にあたることから、その遺徳をしのんで儒式での祭典が行なわれています。

生後50日で父と死別

常省は、慶安元年（1648年）7月4日（以下、日付は旧暦）に藤樹の三男として生まれました。名前は季重、通称を弥三郎といいました。母の布理は、大溝藩士・別所氏の娘で、藤樹に嫁いだ時、中江家には先妻・久子の子である

7歳の長男・虎之助と3歳の次男・鍋之助がいましたが、その子どもたちの世話や家事をよくこなす女性であったと伝わっています。

藤樹は常省が生まれた年の8月25日に死去したため、常省は生後わずか50日で父親と死別することになりました。藤樹は臨終に際して、門人に幼い子どもたちのことを頼んでいたため、上の二人は小川村の村人に、1番幼い常省は、藤樹の高弟である熊沢蕃山の妹が嫁いでいた東万木（青柳）村の岡田家に引き取られることになりました。

岡山藩の学校奉行に

常省は万治元年（1658年）、11歳のとき、蕃山が仕える備前・岡山藩の池田光政に出仕することになりました。藤樹の学問を深く慕っていた池田光政には、先に二人の兄も召し抱えられていましたが、二人は体が弱く、若くして亡くなったため、寛文5年（1665年）には、

中江藤樹の息子

常省

常省が中江家の家督を継ぐことになりました。その2年後には、蕃山の弟である泉仲愛とともに岡山藩の学校奉行となっていました。

延宝6年（1678年）、常省は岡山藩を辞して生地である近江国上小川村に帰郷し、その後京都に転居して、延宝8年（1680年）には、父・藤樹を尊敬していた対馬藩主に招かれて、対馬藩に仕えるようになりました。

京都で藤樹学を開講、 江西常省先生と呼ばれる

貞享4年（1687年）、40歳の時に対馬藩を辞し、京都で藤樹学を講じたところ、門人が増加し、この頃から人々は常省を「江西常省先生」と呼ぶようになりました。その後、対馬藩の江戸藩邸に召し出されて江戸で過ごした後、京都四条に隠棲しました。宝永6年（1709年）5月、

持病の悪化のため上小川村に帰郷し、1か月後の6月23日、62歳で死去しました。

常省の門人は、地元の上小川村周辺住人や大溝藩士などに多く、彼らは常省の死後も藤樹の教えを広めることに尽力したと言われています。常省の墓は、上小川の玉林寺門前に父や祖母と並んで建てられています。

岡文化財課 ☎(32) 4467

編集感

6月中旬、たまたま高架下の道を通った時、川辺にチカチカと光る黄緑色の光を見つけました。思わず「蛍や！」と大声で叫び、聞かれていないか周りを確認。カメラが手元になく残念でしたが、夏を身近に感じられました。高島市は水と緑のまちですから、蛍の名所がたくさんあります。写真に収めるもよし、飽きるまで眺めるもよし。お住いの近くで蛍の光を探してみたいかがでしょうか。(M)



広報たかしま

平成28年

7

月号
No.198

発行▼高島市

編集▼政策部秘書広報課

〒590-1001 滋賀県高島市新旭町北畑ののり番地

☎0740(25)8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp